

# 殺生か禁欲か

—bhūṇahu 考—

村上真完

## 一 はじめに

仏教は生き物を殺すこと（殺生）を誡め、感官を抑制し欲望を鎮めること（禁欲）を説く。しかし不殺生と禁欲とが、実は矛盾・対立する。この点に関しては、『スッタ・ニパータ』（經集 *Sutta-nipāta*, Sn. 664b）にも *bhūṇa-hu*（生き物を殺す、生長・発展を殺す、機嫌を損う、望みを断つ、求愛を拒む、胎児殺し）という語が見え、また散文經典ではこの語が感官の抑制を説く仏（沙門ゴータマ）を非難する遊行者から発せられている（*M. I*, pp. 502f.）。パーリ仏教におけるこの語の用例と解釈の伝統を辿りながら、インド思想・文化一般との接点をも考えたい。

## 二 bhūṇahu の用例 A 生き物を殺す⇨発展（繁栄）を殺す

この語は *Sn* に一回だけ見える。舍利弗と目連を誹って地獄に堕ちたというコーカーリカ比丘について語る詩節（偈）に次のように出ている。

*Mukha-dugga vibhūta-m-anariya, bhūṇa-hu* (*B<sup>o</sup> bhūṇahaṭṭa, B<sup>o</sup> bhūhata*) *pāpaka dukkaṭṭa-kāri*;  
*purisanta kali avajāta, mā bahu bhāṇ' idha nerayiko si* (*Sn. 664*)

これを私共はこう訳した。

『口の悪い者よ。誠のない潔くない者よ。生き物を殺す悪者よ。悪行をなす者よ。』

人（男）の滓よ。サイコロの不利玉よ。卑しく生まれた者よ。こゝで多く喋るな。お前は地獄行きだ。』

（村上真完・及川真介『仏のこゝは註（三）—パラマッタ・ジョーティカー』春秋社 1988, p. 413）

5世紀に作られたその註釈（*Paramattha-jotikā, Pj.*）にはこういう。

『《口の悪い者よ》⇨口穩やかならぬ者よ。《誠のない》⇨真実を離れた⇨虚偽を言う者よ。《潔くない者よ》⇨善くない人よ。《生き物を殺す者よ》⇨生存を滅ぼす者よ⇨発展（繁栄）を失わせる者よ。《人（男）の滓よ》⇨一番滓の人（男）よ。《サイコロの不利玉よ》⇨不運な人（男）よ。《卑しく生まれた者よ》⇨仏の・卑しく生まれた愚<sup>146</sup>』（*mukha-dugga mukha-visama, vibhūta vigata-bhūta, alika-vādi, anariya asappurisa, bhūṇa-hu bhūti-hanaka, vuddhi-nāsaka, purisanta anīma-purisa, kali alakkhi-purisa, avajāta buddhassa avajāta-putta. Pj. II. 479<sup>25</sup>*）

私共の訳文は、註釈に従っており *Sn* の文脈上でも問題はない。しかしその後に出た K. R. Norman の新英訳：

*The Group of Discourses (Sutta-Nipāta)*, Vol. II Revised Translation with Introduction and Notes, The Pali Text Society, Oxford 1992 は、上の偈（*Sn. 664*）を

Foul-mouthed, abandoned, ignoble, an abortionist, evil, doer of wicked deeds, lowest of men, wicked, base-born, do not speak much here. You are doomed to hell. (p. 76. 下線は筆者)

と訳し(上の下線部が、我々の解釈と異なる)、詳しい註記には、*bhūna-hu* は「墮胎者 (abortionist)」で、サンスクリット (㉔) の *bhṛūṇa-han* に対応するところ (p. 270)。*bhūnahu* を *bhūna-hu* と分析すると、後の *-hu* が *-han* (殺す) に由来するところには疑問はない。問題の *bhūna* は *bhūnalīṇ* (*gen. pl. <bhū, 地達の、生き物達の>*)、または *bhūta* (生き物) に由来するとも考えられるが、*bhṛūṇa* (胎児) から導くのは語形上は無理がないようである。しかし「墮胎者」という語がこの文脈に合わない。件の比丘が墮胎に関係しないからである。原始仏教においても墮胎 (*gabbha-pātana*) が重大な罪 (*pārājika*, 波羅夷罪) であるが、その原語が違うので、*bhūna-hu* の解釈に役立つとも思われない。<sup>(1)</sup>

もし原意が「胎児殺し」であつても、その派生的な意味を考えるべきかと思われる。*bhṛūṇa* には「胎児」のほか、辞書 (*PW, etc.*) によれば「妊婦」、「聖典に通じたバラモン」の意味もある。舍利弗等はバラモン出身であるから、「バラモン殺し」の意かとも思われるが、コーカリーカがこの兩人を殺したのではなく、誹ったに過ぎない。してみると「殺し」というのは、比喩的な意味であつて、人に対して痛手を与えたこと(非難、中傷、妨害)を指すのであろうか。上記のパーリ註釈に「生存を滅ぼす(繁栄を殺す)者 (*bhūti-hanaka*)」、「成長(発展、繁栄)を失わせる者 (*vuddhi-nāsaka, Vri vuddhi.*)」とあるので、そのような意味で理解出来るであらう。

同様に『ジャータカ (*Jātaka, J.*)』No. 530 (*Saṃkicca-j. 21*) には次のような偈がある。

*Te bhūna-huno paccanti, macchā bilakatā yathā/*

*Saṃvacchare asankheyye, narā kibbisa-kārino (J.V.266<sup>25-26</sup>)*

『彼等生き物を殺す罪を犯した人達は、

数えきれない年月の間、切り身にされた魚達のように、煮られるのだ。』<sup>(2)</sup>

と。その註釈は「自分の成長(発展、繁栄)を殺した」と解してこういう。

『彼等生き物(成長)を殺す』とは、仙人達を侮蔑する彼等であり、自分の成長(発展、繁栄)を殺したのであるから、生き物(成長)を殺す者達は、肉片にされた魚達のように煮られる。』(*Te bhūna-huno ti te isinaṃ aṭṭvattāro attano vuddhiyā hatattā bhūna-huno koṭṭhāsa-katā macchā viya paccanti. J(A).V.272<sup>25-26</sup>*)

と。父王を殺して王位に即いた王が、後に後悔して昔の友で仙人となっていたサンキッチャに会って、法を犯した者が死後に何処に行くのかを問うのに対して、仙人が答える。*bhūna-huno* を註釈は、「生き物を殺す」などではなく、「自分の成長を殺した」と解し、仙人達を侮蔑して自分の徳性・器量の成長を殺したことを示唆する。

また『ジャータカ』No.543 (*Bhūridatta-j.884*) には次のような偈がある。

*Vedā na tāṇāya bhavanti-r-assa (Bd-ti-d-assa), mita-dduno bhūna-huno (Cs bhūnahato) narassa;*

*Na tāyate paricijṇo ca aggi, doṣ' antaraṃ maccam anariya-kammam (J.VI.206<sup>3-8</sup>)*

『ヴェーダは、友を裏切り、生き物(成長)を殺すこの人の救いとはならない。

また奉祭してきた火も、悪を内に懐き行い潔うきやくからぬ人を救わない。』<sup>(3)</sup>

と。この註釈もこの語を「成長(発展、繁栄)を殺す」と解する。

『この(人の救いとは)なら(ない) (*bhavanti-r-assa*)』という *r* 字は、字音の連結(連声)だけである。ヴェーダは《この生き物を殺す》＝成長(発展、繁栄)を殺し《友を裏切る人の救い》のためにならない＝拠所となることが出来ないという意味である。《また奉祭してきた火》とは、また火を奉祭しても、三種の悪行という悪によって、悪心を懐き行い悪しき人を救わない、護らぬこと。』(*Bhavanti-r-assa ti ra-kāro vyañjana-sandhi-mattarṇ, assa bhūna-huno vuddhi-ghātakassa mita-dduno (Vri-dubbhino) narassa vedā na tāṇa' tthāya bha-*

vanti, paṭiṭṭhā hotuṃ na sakkonti ti attho. **Paricīṇṇo ca aggī** ti aggī ca paricīṇṇo ti vidhena duccarita-dosena sa-

dosa-cittañ paṇa-kammaṃ purisaṃ na tāyaṭi na rakkhati. *J* (A). VI.209<sup>5-10</sup>).

と。「成長を殺す」とは「生き物を殺す」のである。この菩薩 (Bhūridatta 龍王) がヴェーダとバラモンと供犠を讃美する弟 (Ariṭṭha 龍) を論破する文脈である。

### 三 bhūnahu の用例 B 生き物を殺すⅡ成長(発展、繁栄)を殺し限界(規制)を設ける

『中部経典 (*Majjhima-nikāya*, M.)』第75経には、世尊を生き物を殺す者 (bhūna-hu) と呼んで非難するマーガンディヤ (= M) といふ遊行者 (Māgandiya paribbājaka) の言葉がある。彼はバーラドヴァージャ・バラモンの聖火堂 (agṛāgāra) に、沙門ゴータマのために用意されたという草の敷物を見て、こう言う。

“Dud-dīṭhaṃ vata bho Bhāradvāja addasāma ye mayāṃ tassa bhoṭo Gotamassa **bhūna-huno** seyyaṃ addasāma” ti. (M.I.502<sup>14-16</sup>) 「ああ、君、バーラドヴァージャよ。見て悪いものを見ました。我々は生き物を殺す者：かの尊者ゴータマの座所を見たのです。」と。<sup>(4)</sup>

バラモンは彼をたしなめるが、彼は言う。

Sammukhā ce pi mayāṃ bho Bhāradvāja taṃ bhavantaṃ Gotamaṃ paseyyāma, sammukhā pi naṃ vadeyyāma : **bhūna-hu** samaṇo Gotamo’ ti. taṃ kissa hetu : evaṃ hi no sutte ocaratī’ ti. (M.I.502<sup>20-23</sup>) 「君、バーラドヴァージャよ。たとい、我々がかの尊者ゴータマに面と向かつて会っても、面と向かつて彼に「生き物を殺す者だ。沙門ゴータマは」と言いましょう。それはなぜか。なぜなら我々の經典にそう出ているからです」<sup>(5)</sup>」

世尊は天耳をもってその会話を聞いて、それにやつてきつ、Mに語る。

“Cakkhūṃ kho Māgandiya rūpārāmaṇ rūpa-rataṇ rūpa-sammuditaṇ, taṃ Taṭhāgatassa dantaṇ guttaṇ rakkhitaṇ saṇvutaṇ, tassa ca saṇvarāya dhammaṇ dесеti. Idan nu te etaṃ Māgandiya sandhāya bhāsitaṇ : **bhūna-hu** samaṇo Gotamo’ ti. (M.I.503<sup>14-18</sup>) 「Mよ。眼は色を楽しむ処とし色を好み色を喜ぶ。それは如來にあつては調えられ、守られ、護られ、慎まれています。そしてそれを慎む(抑制する)ために法を説きます。Mよ。このことに関して君は「生き物を殺す者だ。沙門ゴータマは」と言ったのではないかね」と。<sup>(6)</sup>

“Etad eva kho pana me, bho Gotama, sandhāya bhāsitaṇ : **bhūna-hu** samaṇo Gotamo’ ti. Taṃ kissa hetu? Evaṃ hi no sutte ocaratī’ ti. (M.I.503<sup>18-20</sup>) 「[Mはうづ]「しかしね、君ゴータマよ。まさにこのことに関して私は「生き物を殺す者だ。沙門ゴータマは」と言ったのです。それはなぜか。なぜなら我々の經典にそう出ているからです」<sup>(7)</sup>と。」

世尊はまたいふ、

「Mよ。耳は声(音)を楽しむ処とし声を好み声を喜ぶ。々。」(々は上の訳の下線部の反復)

「Mよ。鼻は香(匂い)を楽しむ処とし香を好み香を喜ぶ。々。」

「Mよ。舌は味を楽しむ処とし味を好み味を喜ぶ。々。」

「Mよ。身は触(触れるもの)を楽しむ処とし触を好み触を喜ぶ。々。」

「Mよ。意は法(意識の対象)を楽しむ処とし法を好み法を喜ぶ。々。」

と耳・鼻・舌・身・意についても、同様の文を述べる。その度毎にMも同文を繰り返す。ここまでは水掛け論の応答であるが、次いで世尊は欲望の追求よりも、欲望を離れた平静な悟りの境地(涅槃)こそが最上の樂であると、諄々

と説くと、遂にMは納得し驚嘆して、世尊の許で出家し具足戒を受け、程なくして阿羅漢となったという。ここでは文字通りの「生き物を殺す者」という意味ではなく、その比喩的な意味であろう。干渴龍祥(『南伝』10, p.340)は、「世間破壊者」と訳し、片山一良(『中部(マッジマニカーヤ)中分五十経篇I』大蔵出版、1999, p.377)も浪花宣明(『中部経典II』、春秋社、2004, p.451)も「破壊者」と訳しているが、その意味はあまり明解ではない。

漢訳・瞿曇僧伽提婆訳『中阿含』卷38(152)鬚閑提経(7.1.670b-c)には、壊敗地(670b)または敗壞地(670b<sup>245</sup>, c<sup>25</sup>)とある。これは *bhūna-*を *bhūma-*(地)と読んだのである。この問題は、『ミリンダ王の問』(『*Milinda-pañha*, *Mil.*』)においても、王が「悟りの境地(涅槃)は苦と混じっている」と言う論題の中で取り上げる。

『あなたは、かの眼・耳・鼻・舌・身・意の拡張を殺し、損じ、断ち、切り、妨げ、抑える。それによって身も苦しめられる。心も苦しめられる。身が苦しめられると身の苦しみの感受を感じる。心が苦しめられると心の苦しみの感受を感じる。マーガンディヤ遊行者も世尊を非難して、こう言ったではないか。「生き物を殺す者だ。沙門ゴータマは」と。これが、何の理由で「涅槃は苦と混じっている」と私が言うのかというその理由です。』

(『*Ṭunhe taṇ cakkhu-sota-ghāṇa-jivhā-kāya-mano-brūhanan hanatha upahanatha, chindatha upacchindatha, rundhattha uparundhattha. Tena kāyo pi paritappati, citam pi paritappati, kāye paritatte kāyika-dukkha-vedanam vediyati, citte paritatte cetasika-dukkha-vedanam vediyati. Nannu Magandiyo pi paribbājako Bhagavantam garahamāno (314<sup>1</sup>) evam āha bhūta-hacco (Vri bhūna-hu) samano gotamo<sup>2</sup> ti. Idam ettha karam, yenāham karamena brūmi nibbānam dukkhena missan<sup>3</sup> ti. Mil. 313<sup>26</sup>-314<sup>3</sup>)*

これに対してナーガセーナ尊者は、「涅槃は苦と混じっている。涅槃は一向に楽だけである。けれども涅槃を証得する前段階 (*pubba-bhaga*) がそうである(「苦と混じっている」と答えている (*Mil. 314<sup>49</sup>*))<sup>(9)</sup>

ブッダゴース( *Buddhaghosa*、五世紀初頭)の註釈( *Papañcasūdanī, MA* )は、こういふ。

『生き物を殺す者』とは、成長(発展・繁栄)を殺し限界(規制)を設ける。なぜそう言うのか。なぜなら、「眼・耳・鼻・舌・身・意の」六つの門(六感官)において発展する智慧があり、また「そういう」所見をもっているからである。なぜなら彼の所見はこうである。眼(視覚)は拡張させるべきであり、発展させるべきであり、見えなものは見るべきであり、見えなものは超えるべきである。耳(聴覚)は拡張させるべきであり、発展させるべきであり、聞こえないものは聞くべきであり、聞こえないものは超えるべきである。鼻(嗅覚)は拡張させるべきであり、発展させるべきであり、嗅がれないものは嗅ぐべきであり、嗅がれたものは超えるべきである。舌(味覚)は拡張させるべきであり、発展させるべきであり、味わわないものは味わうべきであり、味わったものは超えるべきである。身(身体感覚・触覚)は拡張させるべきであり、発展させるべきであり、触れないものは触れるべきであり、触れたものは超えるべきである。意(意識)は拡張させるべきであり、発展させるべきであり、認識されないものは認識すべきであり、認識したものは超えるべきである。このように彼は六つの門(六感官)において発展を設定する。』( *Bhūna-huno ti hata-vaḍḍhino mariyāda-karakassa. Kasmā evam āha? Chasu dvāresu vaḍḍhi-panā pana laddhikattā. ayaṃ hi tassa laddhiṃ : cakkhu brūhetabban vaḍḍhetabban adīṭṭhan dakkhiṭṭhan, dīṭṭhan samatikkamītabban, sotam brūhetabban vaḍḍhetabban, asutaṃ sotabban, sutam samatikkamītabban, ghāṇam brūhetabban vaḍḍhetabban, agghāyitaṃ ghāyītabban, ghāyitaṃ samatikkamītabban, jivhā brūhetabba vaḍḍhetabba, asāyitaṃ sāyītabban, sāyitaṃ samatikkamītabban. kāyo brūhetabbo vaḍḍhetabbo, apphuṭṭham phusītabban, phuṭṭham samatikkamītabban. mano brūhetabbo vaḍḍhetabbo, aviññātaṃ vijñātabban, viññātaṃ samatikkamītabban. Evaṃ so chasu dvāresu vaḍḍhiṃ pañāpeti. MA. III. 211<sup>415</sup>)*

『しかし世尊は（いふ）。「眼によつて慎むのはよろしい。耳によつて慎むのはよろしい。鼻によつて慎むのはよろしい。舌によつて慎むのはよろしい。（*Dh.* 360）身によつて慎むのはよろしい。語によつて慎むのはよろしい。意によつて慎むのはよろしい。あらゆるところで慎むのはよろしい。あらゆる苦から解脱する』（*Dh.* 361）と。六つの門において慎むこと（抑制）を設定する。それゆえに彼は「沙門ゴータマは発展（繁栄）を殺し、限界規制を設定する」と思つて、「生き物を殺す者だ」と言つた。』

(*Bhagavā* pana : —“Cakkhunā saṃvaro sādhu, sādhu sotena saṃvaro ;

*Chānena saṃvaro sādhu, sādhu jivhāya saṃvaro. (Dh. 360)*

*Kāyena saṃvaro sādhu, sādhu vācāya saṃvaro ;*

*Manasā saṃvaro sādhu, sādhu sabbattha saṃvaro ;*

*Sabbattha saṃvuto bhikkhu, sabba-dukkhā paṇuccatī ti. (Dh. 361)*

*Chasu dvāresu saṃvaran pañāpeti. tasmā so “vaḍḍhi-hato samano Gotamo mariyāda-kārako” ti maññamāno*

*“bhūna-huno” ti āha. MA. III. 211<sup>1524</sup>)*

この箇所について、ダンマパーラ (*Dhammapāla*, 護法〔六世紀頃〕が著したという複註 *Linattappakāsana* (*or -vū, = MA-Ṭṭkā*) があつて、次のように言つて。

『「生き物」(*bhūna*)とは成長（発展）したものと云われる。それを殺すというので、生物を殺す者である。それで「発展（生長）を殺した者」といふ。そしてこの者(M)は眼などにおいて慎むこと（抑制）を規定する。そ

のことは発展（生長）を殺すことであると思ふ。それで「限界規制を設定する」といふ。「拡張すべきであり」とは、広大な対象領域をもたらしつてによつて、発展させるべきであり、満足させるべきである。そしてそのことは経験されないことは経験するによつて「可能」である、といふので、「見えないものは見るべきであり」といふ。そして経験されたことは取り下げられたのである、といふわけで、「見えたものは超えるべきである」と言われた。その他の場合においても同じの趣意である。』（*Bhūnaṃ vuccatī vaḍḍhitam, tam hantī ti bhūna-huno. Tenāha “nata-vaḍḍhino” ti. Taṃ panāyaṃ cakkhādisu saṃvara-viḍḍhānaṃ vaḍḍhi-hanaṇaṃ maññati. Tenāha “mariyāda-kārakassa” ti. Brūhetabban ti ujāra-visayūpaharena vaḍḍhetabban piñetabban. Taṃ pana ananubhūtanubhavanena hotī ti āha “adiḍḍhaṃ dakkhitabban” ti. Anubhūtaṃ pana apanītaṃ hotī ti vuttan “diḍḍhaṃ samatikkamitabban” ti. Sesa-vāresu pi es’ eva nayo. MA-Ṭṭkā, Vri. 2. 203)*

この *bhūna* (生き物) とは ⑥ *bhrūṇa* (胎児、胚) に対応するとしても、胎児を思わせる表現がなく。この複註は *bhūna* を過去分詞 *vaḍḍhita* (成長・発展した) と解しているから、*bhūta* (有った、生じた、成長した、発展した、生き物) と同語と見たのである。<sup>(6)</sup>

#### 四 *bhūna-*, *bhūna-hata-*, *-hacca* 成長（発展）、繁栄、希望、いのち、生き物）を殺す

更に類例を考へてみよう。ビルマ第六結集版三蔵の電子仏典 (*Chaṭṭha Saṅgāyana CD-ROM=CSCD*) とインターネット <http://www.tipitaka.org/search/> で検索すると、*bhūna-* は *bhūnaṃ* (*nom.sg.n.*) と用ゐられ、*bhūna-hu* の外にも *bhūna-hata* (*adj.*), *bhūna-hacca* (*n.*) という複合語もある。Hata (殺された、害された) は語根 *han* (殺す、害する) の過去分詞、*hacca* (殺す、害する) も *han* から派生する。また *bhūna-hata* の例を見よう。

『ジャータカ』No.358 (Culladharmapāḷa-j.1-3) では、マハーパターパ (Mahāpatāpa, 大光輝) 王の第一王妃 (Canda) に生まれた王子 (Dhammapala, 護法) が生後七箇月の時、子を遊ばせていた妃は、王がやって来ても立たなかった。それに怒った王は、処刑人に命じて、幼児の手を切り、足を切り、首を切り、死骸を刀で切り刻ませる。子の助命を哀願し続けた妃は嘆き悲しみ心臓が破れて死ぬ。妃の言葉にいわく

Aham eva dussiyā bhūna-hata, rañño Mahāpatāpassa ;

Etam muñcatu Dhammapālaṃ, hatthe me deva chedehi ti (J Ⅲ.179<sup>16-17</sup>)

私だけが、大光輝王様の「ご機嫌を損ねた落ち度があるものです。」

この護法「王子」を放して下さい。王様。私だけの手を切して下さい。

「*sisam me deva chedehi ti* (J Ⅲ.180<sup>18-19</sup>)」*sisam*。私だけの足を切して下さい。

「*sisam me deva chedehi ti* (J Ⅲ.180<sup>18-19</sup>)」*sisam*。私だけの首を切して下さい。

と(「は同文句省略」。従前の和訳者も同じような解釈をしている。<sup>(10)</sup> 註釈はいう。

『そこで《落ち度がある》とは過失がある。あなたを見ても立ち上がらない落ち度を犯したという意味である。

「偈の *dussiyā* の代わりに」*dusika* という読みもあるが、同じこの意味である。《「ご機嫌を損ねた」とは、損ねられた「ご機嫌を向けられる」お気の向くところを駄目にした(「発展を殺した」という意味であり、《落ち度がある》という語句と結び付けるべきである。わたしは大光輝王様に罪を犯しました。この子「が罪を犯したの」ではございせん。ですから罪のないこの子「護法」「王子」を放して下さい。若しも両手を切らせたいとお望みでしたら、王様、落ち度を犯した私の両手を切らせて下さい」という意味である。』(Tattha *dussiyā* ti *dusika*, tumhe disvā anuññahamānā dosa-kārikā ti atho. “*Dusika*” ti pi pāṭho, ayam eva’iṭho. *Bhūna-hata* ti hata-bhūnā,

*hata-vuddhi* ti atho. Rañño ti idaṃ “*dussiyā*” ti padena yojetabhaṃ. Ahaṃ rañño Mahāpatāpassa aparādha-kārikā, nāyaṃ kumāro, tasmiṃ niraparādhaṃ etaṃ bālakaṃ muñcatu Dhammapālaṃ, sace pi hatthe chedāpetu-kāmo, dosa-kārikāya hatthe me, deva, chedehiṃ ayam ettha atho. J (A). Ⅲ.179<sup>18-20</sup>)

と。この *Bhūna-hata* (nom. sg. f.) とは「この文脈から考えると、王様の「ご機嫌を損ねた」「女」という意味に違いない。また註釈に挙げるその同意語 *hata-vuddhi* (「発展を殺した」とは、王の「お気の向くところ」「ご機嫌を損ねた」というほどの意味と思われる。王妃が子を遊ばせていて立たなかったのに、王が怒る箇所には

『彼(王)は考えた。「この女は今でももう先ず子に頼って慢心を懷き、わしを何とも思わない。さらに子が生長すれば、わしに対して、人という想いさえ持たないであろう。今こそその「子」を殺せよう」と』(So cintesi

“ayam idāṃ eva tāva puttāṃ nissāya mānaṃ karoti, maṃ kismiṃ ci na maññati, putte pana vadāhante mayi” manusso’ ti pi saññaṃ na karissati, idaṃ eva naṃ ghāṭessām” ti. J (A). Ⅲ.178<sup>25-28</sup>)

とある。このように王妃が王の機嫌を損じたというのであり、短慮な王の心の動きが示されていたのである。王様の「ご機嫌を損ねた」というのは、王の将来に向かっている明るい気分・希望・願望を害したというのである。それは註釈にいう「発展を殺した」(*hata-vuddhi*) の意味である。この文脈では王妃が「胎児殺し」であるとか、「生き物を殺す」という意味は認められない。ここで惨殺された王子が仏の前生の菩薩であるという。菩薩は一語も発せず、罪がないのに無惨に殺されたという。なお本来の聖典『ジャータカ』は、韻文のみであるが、ここでは散文部(註釈)なしには、話の筋も分からない。今は話の筋も韻文部とともに伝承されてきたものと想定して、その文脈に沿って、難解な語句の解釈を試みているのである。

（『ビルマ版』では、「チャンダ王子本生」（No.544 Candakumāra-j.）という。前者はデーヴァダッタの前生名、後

者は仏の前生名を題名にしたのである。

バラモン祭司（Khaṇḍabala）が不正な裁判で私腹を肥やしていたが、不当に敗訴した男の裁判を王子（Canda, 月）が是正して大衆の喝采を受けた。以後、父王（Ekarañjan, 一王）は王子に裁判を任せただけで、祭司は収入が絶えて王子を恨む。王は夢に三十三天の美景を夢に見て天に行きたくなり、その方法を祭司に問う。その答えは息女達・王妃達・町人達（negama）・牡牛達を各四人（頭）ずつ犠牲に供えよという。祭司は城外に犠牲の穴（yānāvata）を掘らせる。王は犠牲に捧げる息子達、王女達、王妃達、長者（家主）達を呼び集め、象達、馬達、牡牛達を連れて来させる。王の母も父も供犠を止めさせようとするが、王を説得出来ない。王子が自分達を殺さないで祭司に奴隷として与えよ、と父王に訴えると、王は皆を一旦は解放する。祭司が怒って王をたしなめると、王は再度子達を捕らえさせる。再び王子が父を論じて嘆願すると王は再び王子達を解放した。また祭司に迫られて王は三度皆を捕らえさせる。もう王子も王を説得出来ない。王子は自分の妻達に哀願させ、また妹（Sela）も嘆くが、王は聞き入れない。王子の息子（Vasula）が泣いて訴えると、王は一旦は供犠を止めようと言ったものの、祭司に叱られてまたも王子達を捕らえさせる。祭司は王を皆とともに犠牲の穴に向かわせ、菩薩（Canda 王子）は犠牲の穴に連れて行かれる。その母（Gotamī 王妃）は泣いて訴え、祭司を非難し、菩薩は穴の中で父に助命を乞うが、聞き入れられない。王子の第一妃（Chanda）が泣いて訴えるが、夫の助命は叶わない。祭司が王子を坐らせ剣をとってその首を切ろうと立つのを見て、妃は自分の真実の力をもって夫を救おうとして、真実の誓言（sacca-kiriya）を行い、神々や鬼神の庇護を求める<sup>11</sup>。すると帝釈天（Sakka）は鉄の斧をもって王を脅して、皆を解放させ、祭司は集まった人々に殺された。王も殺されそうになるが、菩薩（王子）に助けられて、賤民として城外に住まわせられる。菩薩は王として善政を行い

寿命が尽きると生天した。そしてこの本生話は、昔の祭司はデーヴァダッタ、王妃はマハーマヤー、王子の第一妃はラーフラの母（Rāhula-mātā）であったと結ばれる。

この物語において、王子（菩薩）の母である王妃の嘆きの言葉（偈）にいわく

Ummatṭikā bhavissāmi, bhūna-hatā paṃsunā ca parikīṇā;

Sace Canda-varaṇ hanti, pāṇā me deva rujjanāti. (J.VI.148<sup>9-10</sup>; 102/679)

『わたしは生きる』望みを断たれて狂い、塵土にまみれるべしやう。

もし立派なチャンダ（王子）を殺すなら、王よ。私の命も滅びるべしやう。』

Ummatṭikā bhavissāmi, bhūna-hatā paṃsunā ca parikīṇā;

Sace Sūriya-varaṇ hanti, pāṇā me deva rujjanāti. (J.VI.148<sup>10-11</sup>; 103/680)

『わたしは生きる』望みを断たれて狂い、塵土にまみれるべしやう。

もし立派なスーリヤ（王子）を殺すなら、王よ。私の命も滅びるべしやう。』

この解釈はこれまでの和訳者（高田修、羽矢辰夫）の理解とは異なる。問題は *bhūna-hatā* を「生き者を殺す」と解するか否か、ということにある<sup>12</sup>。

「生き者を殺す」という理解は、文脈からは支持されない。註釈には

『そこで《望みを断たれて》とは、成長（発展）を殺された。《塵土にまみれる》とは、塵土にまみれた身の狂

女になった歩き回るべしやう。』(Tattha bhūna-hatā ti hata-vuḍḍhi. Paṃsunā ca parikīṇā ti paṃsu-parikīṇa-sarīrā ummatṭikā hutvā vicarissāmi. J(A). VI.148<sup>12-13</sup>)

とある。「成長（発展）を殺された」とは、「私が生きる」望みを断たれた」という意味になるであろう。先の例（C）

No.358) では、「王様の」機嫌を損ねた」(＝私が王の将来に向かったの明るい気分・希望・願望を害した)と解したが、

56

ここは「私の将来に向かったの明るい気分・希望・願望が害された」のである。

次の例は、『増支部経典』(*Anguttara-nikāya*, A.)の怒りを誡める経の中にある。

**Bhūna-haccāni** (T.M. M. S. : bhūta) kammāni, atta-māraṇiṇi (M. Ph. M. : attāmarā) ca ;

Karontā nāvabujhanti (M. Ph. : karonto nāvabujhanti), kodha-jāto parābhavo.

Itāyaṃ kodha-rūpena, Maccu-pāso guhāsavo ;

taṃ damena samucchinde, pañña-vīriyena dīṭhiyā (A. IV.98<sup>14</sup>).

『生き物を殺し自分を死なせる行為(業)をなす者達は悟らない。怒りが生ずれば破滅だ』とは。

この心の思いは怒りの相貌によって死魔に縛られる。

その〔怒りを〕調御(抑制)によって、智慧・精進により、見によって、断ち切るがよい。』

この解釈が問題である。<sup>(註)</sup>この註釈 (*Manorathapūraṇī* = AA) には簡単に

『《生き物を殺す》とは成長(発展)を殺す』**Bhūna-haccāni** ti hata-vuddhīni (B = Vri ; PTS 定本 : bhūta-haccāni

ti hata-vaddhīni. PTS 版 AA. IV.p.49<sup>15</sup>)

と云う。単に「生き物を殺す」ではなく。複註 (*Linutthapākāsinī* = AA-*Ṭṭkā* ; Dhammapāla 作) には

『「生き物」(bhūna)とは成長(発展)と言われる。それを殺す・これらを殺害するといふので、生き物を殺すのである。それで「成長(発展)を殺す」といふ。』(**Bhūnaṃ** vuccati vuddhi, tassa hananāṃ ghāto etesan ti **bhūna-**

**haccāni**. Tenāha 'hata-vuddhī' ti. AA-*Ṭṭkā* Vri.3. 173)

と。これは先に見た『中部経典複註』(MA-*Ṭṭkā*, Vri.2.203) の解釈とは違ひ、bhūnaを単なる「生き物」ではなく、

「成長(発展)」と読む。「成長(発展、繁栄)を殺す」のである。成長(発展、繁栄)していく命を殺すとも言えるであらう。

パーリ『ジャータカ』の最後は布施太子の本生話である。シヴィ(Sivi)国の太子(Vessantara)は過度の布施行の故に、父王(Sañjaya)によって追放され、妃(Maddi)と、息子(Jali)、娘(Kaṇhajinā)ともに森に行つて木の実や根を食べて暮らしていたが、バラモン(Jūjaka)に乞われて息子と娘を手放してしまい、また妃をも別人(実は帝釈天 Sakka)に乞われて施してしまう。サッカは太子に感心して妃を返したが、子供達はバラモンに虐げられながら、終に祖父王の王宮に到る。王は身代金を払って孫達を引き取る。孫が森の生活を語り自分の母の惨状を語って祖父を責める。祖父である王は自分の非を明らかにして〔孫に〕言ひ(Tato rājā attano dosaṃ āvīkaronto āha)。

**Dukkapaṇ ca hi no putta, bhūna-haccan katvaṃ maya ;**

yo'haṃ Sivinaṃ vacanā, pabbājesim adūsakaṃ (J.VI.579<sup>16</sup>, v.687)

『わしの子よ わしは実に悪いこと・殺生なことをした。わしがシヴィ人達のことばによって、落ち度のない〔太子〕を追いだしたとは。』<sup>(註)</sup>

王は孫の言葉に従つて、太子を迎えに后と孫と軍勢を引き連れて森に向かい、ついに一家全員が再会する。すると王は子に謝ひ (Tato rājā puttaṃ khamāpento ; Vri : attano dosaṃ khamāpento āha) 孫に言つた同じ偈を述べる (J.VI.587<sup>17,18</sup>, v.748)。パーリ註釈には

『《殺生な》とは、成長(発展)を殺す業』(**bhūna-haccan** ti vuddhi-ghāta-kammaṃ. J (A).VI.579<sup>19</sup>)

であつて、「前途の希望や発展を殺した」と理解できるにしても、「生き物を殺す」ではあり得ないし、「胎児殺し」でもない。なお上には敢えて「殺生なこと」と訳したが、「むごい」「残酷な」の意であつて、単に「生き物を殺す」



の意味ではないが、比喩的には「命を殺す」でもあろう。常に語意は文脈によって限定されるのである。以上聖典と註釈類における *bhūna*（生き物、成長、発展、繁栄、希望）の用例を検討した。

## 5 *bhūna*, *bhūna-hata*, *-hacca*, *-hu* についての文典 *Saddanīti* の解釈

これらの語は、伝統的な文典等にも出ている (CS-CD, <http://www.tipitaka.org/search> 参照)。中でも文典 *Saddanīti* (= *Sdn.*、ビルマ：パガン朝1154年 *Aggavamsa* 著) が詳しい。<sup>(15)</sup>

この文典では *bhūna* は語根 *√bhū*（有る、在る）の派生的な意味から導かれる。<sup>(16)</sup>

『意味の優勢と結びつく次のように留意される (*atthāṭṭhaya-yoge* *evaṃ upalakkhetabham*)。語根 *√bhū* の意味の優勢と結びつく、成長（発展、繁栄）の意味になる（見られる (*bhū-dhātu-atthāṭṭhaya-yogato vadāhane dīṭṭhā*)。或いは「一方に坐ったリッチャヴィ人マハーナーマは感懷を洩らした。《ヴァジ族は繁栄する。シ》」*ekam-antaṃ nisīno kho Mahānāmo Licchavī udānaṃ udānesi bhavissanti vajjī bhavissanti vajjī*. ti (A. III.76<sup>(17)</sup>) *iṭṭhā*)。或いは「私だけが、大光輝王様の機嫌を損ねた落ち度があるのです」と (*aham eva dūsiyā bhūna-hatā, rañño Mahā-patāpassā* (J. III.179<sup>(18)</sup>) *ti vā*)。或いは「ヴェータは、友を裏切り生き物（成長）を殺す人の救うはならぬ」と (*vedā na tāṇāya bhavanti-d-assa, mita-dūno bhūna-huno narassā* (J. VI.206<sup>(19)</sup>) *ti vā*)。或いは「私は『悪』を殺すつもりだ」と (*bhūna-haccaṃ katam mayā* (J. VI.579<sup>(20)</sup>) *ti vā*)。以上のちゆに [*√bhū* が] 成長（発展、繁栄）の意味で見られる。』 (*evaṃ vadāhane dīṭṭhā*. *Sdn.* I. 451-7, Vri.60) のように *√bhū* とその派生語に成長（発展、繁栄）の意味があるという実例に *bhūna* の上記の例文も挙げられる。そして *bhūna* は鼻音 *m* に終わる中性名詞の類であるという。

*Bhūtam*（有った、生き物、元素）、*maḥā-bhūtaṃ*（大種、大元素）、*bhavitam*（有る、*√bhavin*）、*bhūnam*（発展、繁栄）、*bhavanam*（有る、*√bhav*、存在、領域）、*parābhavanam*（克服）、*sambhavanam*（発生）、*vibhavanam*（滅無）、*pātu-bhavanam*（顕現）、*āvi-bhavanam*（出現）、*tiro-bhavanam*（隠滅）、*vinā-bhavanam*（別離）、*sotthi-bhavanam*（平安である）、*paribhavanam*（輕蔑）、*abhibhavanam*（征服）、*adhi-bhavanam*（征服）、*anubhavanam*（経験）、*samanubhavanam*（体験）、*paccanubhavanam*（現体験）*ti niggaḥī anta-napumsaka-līngam*（これは、鼻音 *m* に終わる中性名詞である。 *Sdn.* I. 63<sup>(21)</sup>, Vri.86)

ここに列举される中性名詞の多くは的確な意味内容がよくわからないが、語形から推定して大凡の訳語を与えた。<sup>(22)</sup> これら *√bhū* の派生語群は、同類の語であり、*bhūnam* は *Bhūtam*（有った、生き物、元素）や *bhavitam*（有る、*√bhavin*）、更に *bhavanam*（有ること、存在、領域、住居）と同類の語であり、鼻音 *m* に終わる中性名詞の類であるという。

また *bhūna* の意味に触れて、最初と同じ例文とともに次のように言う。

『*Bhūna* とは「有る」とあり、*bhūna* は「成長（発展、繁栄）」である (*bhūnan ti bhavanam bhūnam vaddhi* (PTS. *vaddhi*))。『私だけが、大光輝王様の機嫌を損ねた (*bhūna-hatā*, J. III.179<sup>(23)</sup>) 落ち度があるもので』と。また「わしは『悪』を殺すつもり (*bhūna-haccaṃ*, J. VI.579<sup>(24)</sup>) をした」と。これがこの意味を成り立たせる言葉である (*idam etassa tthassa sādhaṃ vacanam*)。『有る』とは有るという働きである (*bhavanam ti bhavana-kriyā*)。或いは「有る」というのは「成長（発展、繁栄）した」というのであり、*√bhū* に有情達は息子・娘達と種々の栄耀栄華によって「繁栄している」という「有る」という家がといわれる (*Attha vā bhavan ti vadāhan ti ettha sattā puttā-dhītāhi nānā-sampattīhi cā ti bhavanam vuccati geḥo*)。『私の父のちやうど』と

〔記へんべい〕 (petikaṃ bhavaṇaṃ mama (J.VI.511<sup>28</sup>) ti)。これがこの意味を成り立たせる言葉である (idaṃ etassa tthassa sādhaṇaṃ vacanaṃ)。(Sdn. I. 85<sup>30</sup>-86<sup>31</sup>, Vri.115) と。bhūna は bhuvana (有るこゝ、発展、繁栄、領域、住居) である。そして例文から予想されるその意味は、既に触れたように「希望、願望、期待」のようである。議論はなお続くが、この出版本の編者の解釈以外には、「胎児殺し」という解釈はないようである。

## 六 総括：bhūnahu は胎児殺しか。否。成長（発展、繁栄）を殺し限界規制を設けること

上座部仏教は bhūnahu をめぐる伝統説をどう総括したのか。ビルマ (Burma, Myanmar) で行われた第六結集 (1954-56) におおて著された *Visuddhimagga Nidanakathā* (= *VismNK*, 清浄道論因縁話) という著作 (教義書) がある。*Visuddhimagga* (= *Vism*, 清浄道論) は、五世紀初葉にブッダゴース (Buddhaghosa, 仏音) が著した仏教概論であるが、*VismNK* はブッダゴースの生涯や著作を解説する形をとりながら、パーリ仏典に見える難解な語句や問題の解釈を示している。それは第六結集版三蔵の電子仏典 (Chaṭṭha Saṅgāyana CD-ROM = CSCD ; ローマ字版 : <http://www.tipitaka.org/romn/>) に含まれている。<sup>(2)</sup>

そこにはブッダゴースがバラモンの出自であるということ巡る議論の中で、初めて「胎児殺し」という解釈が対論者の議論に出てくる。

『しかもそこで上座ブッダゴース師がバラモンではないことを証明するために第二の理由も次のように出ている (puna pi tena ācariya-Buddhaghosa-ttherassa abrahmaṇa-bhāva-sādhanaṭṭhaṃ dūṭṭyaṃ pi kāraṇaṃ evaṃ āhataṃ. *VismNK*. Vri.10)。

バラモンの諸典籍において、胎児を殺す者を表す胎児殺し (bhūna-han) という語句が、パーリ聖典には bhūnahu (bhūna-hano) と見えている。「マーガンディヤ経」において、妻との性交・同棲がないので、生まれるに値する胎児を失わせることについて、遊行者マーガンディヤ (M) が世尊を「胎児殺しだ、沙門ゴータマは」と言った。それをブッダゴースが知らないということが、その註釈において、もう明らかである。なぜなら彼はそこでは bhūnahunno (胎児殺しの) という語を「成長 (発展、繁栄) を殺し限界規制を設ける」と註釈しているからだ。』 (Brahmaṇa-ganthesu gabbha-ghāta-vācakaṃ bhūnaha ti padaṃ Pajīyaṃ bhūnahu (bhūnahano) iti dissati. Māgaṇḍiya-sutte bhariyāya methuna-saṇṇvāsābhāvena uppaṇāraha-gabbhassa nā-sakattaṃ sandhāya Māgaṇḍiyo paribhājako bhagavantam bhūnahu (bhūnahano) samaṇo Gotamo ti āha. Taṃ Buddhaghoso na jānāti ti pākato yeva tad-attha-saṇṇvaṇṇanāya. Tattha hi tena bhūnahunno ti (bhūnahanaṇṇassa) padaṃ hatavaddhino mariyāda-kāraṇassa ti vaṇṇitaṃ ti. *VismNK*. Vri.10)

『それももう正しくないままである。なぜなら M によって、触れられる対象を楽しまないことだけに關して生き物を楽しまないことについても言われたのである。なぜならその経には「Mよ。眼は色を楽しむ処とし色を好み色を喜ぶ。それは如來にあつては調えられ、守られ、護られ、慎まれています。そしてそれを慎む (抑制する) ために法を説きます。Mよ。このことに関して君は「生き物を殺す者だ。沙門ゴータマは」と言ったのではないかね」と。しかしね、君ゴータマよ。まさにこのことに関して私は「生き物を殺す者だ。沙門ゴータマは」と言ったのです。それはなぜか。なぜなら我々の經典にそう出ているからです」と。…乃至…「Mよ。意は法 (意識の対象) を楽しむ処とし法を好み法を喜ぶ。々 (上と同文)」と。このように世尊の問いと M の主張とが出てい

(Tam pi ayuttam eva. Na hi Māgaṇḍiyena phoṭṭhabbārammaṇāparibhoga-matam eva sandhāya **bhūṇahu**-bhāvo vutto, atha kho channam pi lokāmisārāmmaṇānaṃ aparibhogam sandhāya vutto. Tasmā hi sutte “Cakkhum kho Māgaṇḍiya rūpārāmaṇa rūpa-rataṇa rūpa-sammuditaṇa, taṇa tatthagatassa dantaṇa guttaṇa rakkhitaṇa samvutaṇa, tassa ca saṇvārāya dhammaṇa deseti, idaṇa nu te etaṇa Māgaṇḍiya sandhāya bhāsitaṇa **‘bhūṇahu’** samaṇo Gotamo’ ti. Etad eva kho pana me bho Gotama sandhāya bhāsitaṇa **‘bhūṇahu’** samaṇo Gotamo’ ti. Taṇa kissa hetu, evaṇ hi no sutte ocaratī ti...pe...mano kho Māgaṇḍiya dhammārāmo dhamma-rato dhamma-sammudito, so tatthagatassa danto gutto rakkhito samvuto, tassa ca saṇvārāya dhammaṇa deseti, idaṇa nu te etaṇa Māgaṇḍiya sandhāya bhāsitaṇa **‘bhūṇahu’** samaṇo Gotamo’ ti. Taṇa kissa hetu, evaṇ hi no sutte ocaratī’ ti (M. No. 75).

Evam Bhagavato ca anuyogo Māgaṇḍiyassa ca paṭiñña āgata. *Vism* NK. Vri 10-11)

『なぜなら、性交にふけることによって触れることが出来る対象を楽しむことを原因としてのみ胎児の托生が可能となるという、それを楽しむことのみに関して、胎児殺し(の生き物を殺す者)ということが出来る。けれどもそのほかの色等(＝色・声・香・味・法)という五つの対象、しかもとりわけ法(意の対象)という対象には単なる意の認識によって楽しむことを原因とするいかなる胎児の托生もないという、それら(色・乃至、法)を楽しむことに関して胎児殺し(の生き物を殺す者)ということがもう出来ないのである。しかしMはそれら全てに関しても主張として「生き物を殺す者」と言ったのである。そして彼の理由が「なぜなら我々の経典にそう出ているからです」と示されている。それゆえに、今たとい、バラモンの諸典籍において、**‘bhūṇa-**

**hu** (**bhrūṇa-hā**) という語が胎児殺しの意味に見られるにしても、しかし「マーガンディヤ経」においては、この意味は正しくはない。というわけで「ブッダゴーサ」師によって「成長(発展、繁栄)を殺し限界規制を設ける」というこの意味だけが、古人の註釈における言説が行われていることによって、明らかにされた、と知るべくである。』(Ettha hi methuna-paṭisevāna-vasena phoṭṭhabbārammaṇa-paribhoga-hetu eva gabbha-paṭiṭṭhānaṃ sambhavatī ti tad-āparibhogam eva sandhāya **‘bhūṇahū’** ti vattum arahaṭi, tad-aññesaṇa pana paṭiṭṭhānaṃ rūpādi-ārammaṇānaṃ, tatthaṇaṇi viśesato dhammārammaṇassa suddha-mano-viññāṇena paribhoga-hetu n’atthi kiñci gabbha-paṭiṭṭhānaṃ ti tesam aparibhogam sandhāya **bhūṇahū** ti vattum na arahaṭi yeva, Māgaṇḍiyena pana sabbāni pi tāni sandhāya vutta-bhāvo paṭiñāto, kāraṇaṇ ca ‘ssa dassitaṇa “evaṇ hi no sutte ocaratī” ti. Tasmā kiṇ cāpi dāni brāhmaṇa-gaṇthesu **bhūṇahu**-(**bhrūṇahā**.) saddo gabbha-ghātana’ tthe dissati, Māgaṇḍiya sutte pan’ eso attho na yujjati ti ācariyena “ata-vadāhi mariyāda-kārako” ti ayam eva ‘ttho porāṇa’ttha-kathāya bhāsā-parivartana-vasena pakāsito ti vedītabbo. *Vism* NK. Vri. 11)

「胎児殺し」という意味は、触(触れられるもの)の領域に属する女性を避ける場合にだけ当てはまるが、色・声・香・味・法(意の対象)の認識において慎む場合は、「胎児殺し」には当たらないという。このように伝統説を再確認したのである。

## 七 結び：bhūṇahu(生き物を殺す、発展を殺す)とbhrūṇa-han(胎児殺し)との相似性

*Sdn* の校訂編集者 (Helmer Smith 1882-1956) はその最後巻 (V, 2 Index Vervorum) に bhūṇa, bhūṇa を *②bhrūṇa* (胎児) に対応する男性名詞として出し、前引の箇所 (*Sdn*. I. 45) に出る複合語にも、*⑤* の対応関係を示す。但し

bhūṇa という語形は極めて稀で、*Sdn* にも求めがたい。また *Sdn* が bhūṇa を /bhū/ から導き中性名詞と見る趣旨を彼は採用しない。しか<sup>①</sup> ①bhūṇa-hu が ⑤bhrūṇa-han (胎児殺し) に遡る可能性があるにしても、①の伝統はそれを知らず、「胎児殺し」にも殆ど触れないのである。一方 ⑤bhrūṇa-han (胎児殺し) は曖昧で多様な意味を含む。

bhrūṇa-han という語が『アタルヴァ・ヴェーダ (*Atharva-veda*)』以来知られているが、<sup>②</sup>法典類では主に「バラモン殺し」の罪の意味で用いられたようである。明確に「胎児殺し」を意味している次の一例でも、それは単なる堕胎ではない。

『娘を嫁がせる者(＝父・祖父・兄弟・親族・母)が娘を適時に』嫁がせない時は、月経期毎に胎児殺しの罪を負わねばならぬ。もし嫁がせる者がいない時には娘は自選結婚をしてよろしく。』(*aprayacchan samāpnoti*)

bhrūṇa-hatyām rīāv rītau / gamyaṇ tv abhāve dāṛṇāṇ kanyā kuryāt svayaṇ varam // *Yājñavalkya-smṛti* 1.64<sup>③</sup>

これは単なる「胎児殺し」ではなくて、結婚と妊娠の可能性を殺し、娘の婚期を逸する罪である。このような意味の「胎児殺し」の例は、大叙事詩 (*Mahābhārata*, *MBh*) には多い。例えばマヌの子孫・ヤヤーティ王は、バラモンの娘に好かれ、娘の父に許されて結婚したが、その父から交際を禁じられた女に求愛されて、結婚して子を儲けたことが、知られて本妻に怒られ、バラモンに呪われて老人にされてしまうところで、王が「胎児殺し」の罪を避けるためであったと弁明していく。

『導師よ。魔王の娘が受胎期を(逸したくないと)求めるので、他の思いもなく私は、この法にかなったことをしたのです ( *ītum vai yācamānāyā bhagavan na-anya-cetasā / duhitur danava-indrasya dharmyam etat kṛtam mayā* )。女が受胎期を(迎えて)求めて、選ばれた男が(情愛を)与えないならば、ここで彼は胎児殺しだと梵を論じる人(バラモン)達に言われます、バラモンよ ( *ītum vai yācamānāyā na dadāti pumān vṛtaḥ / bhrūṇa-hā-ity u-*

*yate Brahman sa iha brahma-vādibhiḥ* ) 』。

愛欲を望んで身をまかせようとする女性に、密かに求められても近づかなければ、法において彼は胎児殺しだと知者達に言われます ( *abhiḥkāmaṁ striyaṇ yas tu gamyaṇ rahasa yācitah / na-upaṇi sa ca dharmeṣu bhrūṇa-hā ity ucyate budhaiḥ* ) 』 (*MBh*. 1.78.31-33)<sup>④</sup>

この「胎児殺し」の意味は、女性の求愛を拒否し、その希望(願望、期待、意向)を殺すのである。それは ①bhūṇa-hu に対する ①の伝統的解釈：「成長(発展、繁栄)を殺す」に通じ、bhūṇa-hu の類語の意味とも連なる。また ⑤bhrūṇa-han の bhrūṇa も胎児 (*garbha*) だけではなく、希望 (*āśa*) または不安 (*āśāṅkā*) を意味するという文典家 (*Kṣīrasaṁin*) の説もある。<sup>⑤</sup> ①bhūṇa の伝統的な解釈は「胎児」ではなく、「成長(発展、繁栄)」であり、「生き物」でもあった。これは上に見た「胎児殺し」の意味(求愛拒否)ともほぼ相似する。それは邦語では、「命を殺す」、「命を大事にしない」と表せるであろう。インド文化における「命を大事にする」という優しい配慮の伝統を発掘しえたように思う。<sup>⑥</sup>

(1) ノーメンによると ①bhūṇa-hu が ⑤bhrūṇa-han に相当する(2)を指摘したのは Baburam Saksena, 1936, *Pali bhūṇa-ha*, BSOS, 8, pp.713-14 及び Ludwig Alsdorf, Les Études Jaina, Collège de France, 1965, pp.46-47 であるという。後者は n が a となるのは Asoka 碑文に見られる東方方言の特徴と考える(この文献は後藤敏文教授から頂戴した)。この語原説に関する ①の伝統からの批判については本稿六参照。

次に堕胎 (*gabha-pātana*) については *Vin.* III pp.83-4. 『南伝』1 (上田天瑞訳), pp.137-39 参照。

(2) 高田修訳『南伝』36, pp.261-262: 「彼等殺生者は苦しむ／魚の寸断せらるること／非行犯せる人々は／量るを得ざる歳月を」。片山一良訳『ジャータカ全集』8、春秋社、1982, p.115b: 「かれら殺生者は 苦しめられる／まるで魚が 切られるように／凶悪犯の ものたちは／はかり知れない 年

月を」。

- (3) 高田修訳『南伝』38, p.313:「吠陀は、斯かる人の依処とはならず／友を裏切り、生き物殺すなる人の、その依処と／また、崇めらるる火も護ることあらざらむ／悪心懷き、聖ならざる行ひなすその人を」。羽矢辰夫訳『ジャータカ全集』9、春秋社、1991, p.189b:「ヴェータは、友を裏切り、殺生する人の／よりどころとはならない。／崇められる祭火も『決して』護ることはない。／怒りを内に懷き、不聖の行為をなすその人を」。

- (4) 漢訳『中阿含』卷38(152) 鬚闍提經。T. 1.670b<sup>15,17</sup>:婆羅婆。我今不可見見。不可聞聞。謂我見沙門瞿曇臥處。所以者何。彼沙門瞿曇壞敗地。壞敗地者。無可用也。

- (5) 『中阿含』T. 1.670b<sup>23,5</sup>:婆羅婆。若見沙門瞿曇者。我亦說此義。所以者何。彼沙門瞿曇敗壞地。敗壞地者。無可用也。

- (6) 『中阿含』T. 1.670c<sup>12,5</sup>:鬚闍提。不調御眼根。不密守護。而不修者。必受苦報。彼於沙門瞿曇。善自調御。善密守護而善修者。必得樂報。鬚闍提。不調御眼根。不密守護而不修者。說沙門瞿曇敗壞地。敗壞地者。無可用耶。

- (7) 『中阿含』T. 1.670c<sup>12,5</sup>:如是。

- (8) 『南伝』59 弥蘭王問經下(金森西俊訳)、pp.164-168:中村元・早島鏡正『ミリンタ王の問』3、平凡社、昭和39年

pp.90-94参照。問題の語 *bhūta-hacco* (*var. bhūna-hu*) を前者は「有類の殺害者」(p.166)と、後者は「生類の殺害者」(p.91)と訳している。

- (6) 後述するように Helmer Smith ed. *Saddaniti* pp.63<sup>9</sup>, 86<sup>9</sup>, 206<sup>9</sup>, 230<sup>9</sup>, 238<sup>11</sup>参照。

- (10) 立花俊道訳『南伝』32, p.43「わらはこそ大光輝王の／意に背き、敬意を缺きたれ／護法を放て、王よ／わらはの手をぞ断たしめよ」。松村恒・松田慎也訳『ジャータカ全集』4、1988年、p.182ab:「マハーパター王に／非礼をはたらきし罪はわれのみであれば、／このタンマバーラを放ちたまえ、／王よ、わが手を切らしめよ」。なお同 pp.327-328 註の *bhūnahata* をめぐる学説紹介は有益である。

- (11) 「智慧劣るカンタハーラが悪業をなす、この真実語をぞなえた私が夫とともにいますように (Yena sacceṇa Khaṇḍa-halo, pāpakammaṇ karoti dummehlo; Etena sacceva-jjina samaṇgini sāmikena homi J.VI.154<sup>28,30</sup>)。…おや、／ここにやうて来られた神々と過去や未来の夜叉達は、寄る辺なく庇護を求める私を救護してください。私は願います。夫よ、私が負けませんように、／この devatā idhagatā, yāni ca yakka-bhūta-bhavyāni (Vri. bhavyāni); Setaṇṇeṇiṇ anāthaṇ tātātha maṇṇ, yācāmi ahaṇṇ [pati māhaṇ ajeyyaṇ]” ti J.VI.155<sup>3,9</sup>)」

- (12) 高田修訳『南伝』38, p.190:「吾は塵穢に打ち塗れ／生

ける者殺す狂者とならむ／若しも優れし戦達羅を殺す者あらば／生きとしものは吾がため、王よ、滅びなむ」。羽矢辰夫訳『ジャータカ全集』9、1991, p.139:「私は生き者を殺す狂女となるでしょう。それゆゑ塵垢にまみれた。王さま、もしも、優れるチャンダが殺されれば、私によつて生き物は滅びるでしょう」。

- (13) 土田勝彌訳『南伝』20, p.351:「他を殺し自らを死なしむる業をなすことあり」。

- (14) 高田訳『南伝』39, p.513:「実にそは、吾が子、吾が谷なりき／殺生吾は為せるなり／吾戸毘民の言葉以て／無辜なる彼を追放せるは」。辛島静志訳『ジャータカ全集』10、1988, p.243b:「わが孫よわしは罪深きことをした／胎児殺しをしたも同然／シヴィ国民のことばによつて／とがなきかれを、追いだした」。同 p.300b 訳註(62) は参考文献を含み有益。

- (15) Helmer Smith ed. *Saddaniti*, La Grammaire Palie d'Aggavansa 1928, -29, -30, -49, -54, -66 (PTS 2001, 3冊本). 最後巻 V, 2 (Index Vervorum) は彼の死 (1956) 後 Nils Simonsson によつて完成した。水野弘元: Helmer Smith ed. *Saddaniti*, La Grammaire Palie d'Aggavansa 『印仏研』4-2、昭和31(1956)年3月、pp.259b-263a は、この書の紹介と解説である。CS-CD (=http://www.tipitaka.org/romn) はスミット本の2巻分まで (PTS ed. 2001,

vols. I & II) を含み検索可能である。スミット畢生の校訂刊本は詳細な索引と術語解明 (Conspectus Terminorum, PTS, ed. 2001, vols. III & IV, pp.1105-1172) を伴ひ、より有用である。スミット本 (PTS 版) は 1765 ページから成るが、1694 ページまでが彼の執筆であるという。

- (16) 「[Bhū] は「有る」の意味に「用ゐられる」。語根 [Bhū] は「現に有る」との意に用ゐられる」(Bhū satāyaṇ, bhū-dhātu vijjamaṇātāyaṇ vattati. *Sdn.* I, p.3<sup>3</sup>, Vri=Myanmar 4)

- (17) 世尊がヴェーサーリー (Vesālī) に滞在中、托鉢の後に林 (Mahāvana) の樹下に昼の休息に坐っておられるとき、多くの若者 (Licchavi-kumārakā) がやうて来て、世尊に近づき合掌して黙然として近侍している。そこにリッチャヴィ人 Mahanāma Licchavi が来て、乱暴無礼な若者が仏に近侍しているのを見て「ヴァッジ (Vajji) 族は繁栄する。々」と感懷を洩らす。それに対して世尊は良家の子息 (kula-putta) の五法を説く。それは努力をして如法に得た財物をもつて、1母や父・2子や妻・3使用人・4神 (devatā) ・5沙門やバラモンを大事にし尊敬・供養することである。この五法がある者には繁栄のみが期待され、衰亡がなく (A. III. 75-78 要註)。

- (18) この内、大半が bhavana (を含む)。これは [Bhū] の guṇa 形 (bhav) に語尾 ana がついた形で、動詞の意味を示す名

語 *vi* (See W.D. Whitney, *Sanskrit Grammar*, § 1150)°.

法典】中公文庫 1991, pp.276, 399.

- (19) タンベギリ (Dhammagiri) の研究所: Vri (= Vipassana Research Institute) で CD に作成されて無料で配布され、またインターネットにも公開されている [同研究所はインドのブナラーシユトラ州イガットプuri (Igattupuri, Munbai) の東北約137km; ナーシタ南西約40km) 郊外にある]。筆者

は *Vissuddhinigga Nidānakathā* (= *VismNK*, 清浄道論図縁話) を知ったのは、OSCD ヴィンターネーム <http://www.tipitaka.org/search/bhūnahu> を検索した結果である。

- (20) *Sṭh.* p. 1661<sup>104</sup> *bhūṇa, bhūṇa [bhrūṇa, v. Kṣīr p.181, 2] m; bhūṇa-hacca [bhrūṇahatyai n, 45, 6, n.4; A IV 98, 2; bhūṇa-hatā [bhrūṇaghni] f, 45, 4; n.2; bhūṇa-hu [bhrūṇa-han]m, 45, 6, n.3; Sn 664b. [Kṣīr 4 Kṣīratarāṅginī, Kṣīrasvāmin's Kommentar zu Pāṇini's Dhātupāṭha (Indische Forschungen Doppelheft 8/9), Zum ersten Mal herausgegeben von Dr. Bruno Liebh, Breslau Verlag von M. & H. Marcus 1930].*

- (21) *Aḥarva-Veda-Saṃhitā* (Saunaka-Rezension) 6.112.3; 6.113.2. 辻直四郎訳: 『アタルヴァ・ヴェーダ讃歌—古代インドの呪法—』(岩波文庫, 1979) pp.175-76.

- (22) *Gautama-dharma-sūtra* 3.2.1, 3.3.9; *Baudhāyana-dharma-sūtra* 3.5.5, 3.6.11; *Manu-Smṛti* 8.317, 11.249. 中野義照訳: 『トマス法典』1951, pp.225, 334; 渡瀬信之『トマ

- (23) 中野義照訳: 『ヤージニニヤヴァルキヤ法典』1950, pp.11-12 参照。

- (24) 上村勝彦訳: 『マハーバーラタ』1 (ちくま学芸文庫 2002), p.325 参照。 *MBh.* は Critical ed. による。検索には *Mu-neo Tokunaga* (徳永宗雄) の Machine-readable Text of the *Mahābhārata* に依った。 [http://tiger.bun.kyoto-u.ac.jp/mtokunag/skt\\_texts](http://tiger.bun.kyoto-u.ac.jp/mtokunag/skt_texts) 参照。

- (25) 前註 (20) で引用したように H. Smith に従って *Kṣīrta-rūṅginī* p.181<sup>105</sup> を見る。

*bhrūṇa āśyām. bhrūṇayate. bhrūṇo garbhah. āśankāyām ity eke [bhrūṇa は希望 (āśā) の意味で、(動詞現在活用形 4)] bhrūṇayate (希望する、願う、懼れる)。bhrūṇa は胎児である。[それは] 不安 (āśanīkā) を意味すると、或る人達はそう]*

とある。なおこの著者クシーラスフーミンは12世紀頃のカシュミールの文典家である。

- (26) 「命を大事にする」という優しい配慮の伝統は、わが国にも有ると思うのであるが、それを、路傍の死者を弔う墓碑や地蔵像、また水子供養や水子地蔵の流行に関して、感じるといふのは、当たっていないであろうか。

## 阿閼仏国経のスピード感

佐々木 閑

〈阿閼仏国経〉<sup>あしあきくわにやうきやう</sup>は、〈小品系般若経〉や〈維摩経〉にも先行するといわれる、非常に古い大乘經典である。<sup>(1)</sup>『大阿弥陀経』や『無量寿経』などの浄土系經典にみられる「西方極樂世界におわします阿弥陀如来への信仰」とは好対照をなす「東方妙喜世界におわします阿閼如来への信仰」を主題とするが、しかし、現段階では両者に直接の先後関係は認められておらず、両系統の関係はいまだ説明されていない。おそらくは、異なる場所で発生した複数の「別世界におられる勝れた如来、仏国土への信仰」が經典化し、その後入り交じることで共通項を含むようになり、それが今に伝わっている、ということであろう。私自身は、両者に密接な前後関係があるようにも感じるのだが、今はその問題には触れない。

本稿では、その〈阿閼仏国経〉に説かれる「悟りへの道」を考察し、そこに現れているきわめて特徴的なスピード感について考察する。〈阿閼仏国経〉に関しては、近年発表された佐藤直美の研究が最新にして最重要であるのでこれを研究のベースとして利用した。また佐藤さんからは、個人的に博士論文の写しを頂戴しているが、そこには研究編に加えて、漢訳二本とチベット訳校訂テキスト、それにチベット訳からの和訳が掲載されている。正式な出版物で

印度哲学仏教学 第二十四号

平成二十一年十月二十五日 印刷  
平成二十一年十月三十日 発行

編集・発行 北海道印度哲学仏教学会

代表者 藤田宏達

印刷所 富士プリント株式会社

〒060-0916 札幌市中央区南十六条西九丁目

発行所 北海道印度哲学仏教学会

〒060-0810 札幌市北区北十条西七丁目

事務局

〒065-8567 札幌市東区北十六条東九丁目

札幌大谷大学仏教文化研究室内

電話 〇一七四二一六五一番代  
振替 〇二七二〇一六一二六七〇九番